

End of Life Careにおける実存的・科学的支援展開に関する研究**－高度専門職としてのソーシャルワーカーへの期待－**

○ 医療法人社団 崇仁会 船戸クリニック 天音の里 松久 宗丙 (6214)

キーワード：エコシステム構想、生き方の伝承、相互変容プロセス

1. 研究目的

わが国では高齢化が急速にすすみ、高齢者の生活問題も多様化してきている。その一つに高齢者の死にゆくプロセスへの支援も不可欠となってきた。

報告者は、ソーシャルワーカーとして End of Life Care の臨床に身をおき、寝たきりで意思表示の困難な End of Life の状況にある要介護高齢者に寄り添ってきた。

ただ、そのなかで「この人が本当に望んでいる支援とは何か」と考えることが少なくない。したがって、意思表示が困難になる前から、今後の方向性などをその家族とともに確認しておくことにより、意思表示の困難な状況になっても本人やその家族が望んでいる支援を継続しておこなうことができるのではないかと考えている。End of Life の状況にある要介護高齢者の疾病や疾患に着目するのではなく、その人の固有な生活の全体性に着目する必要があると痛感するからである。そのためには、科学的な支援展開である「西洋科学の知」のみではなく、利用者の実感にもとづく実存的な「臨床の知」も求められている。

そこで本研究では、実存的・科学的支援展開としてのエコシステム構想を End of Life Care において活用し、End of Life の状況にある要介護高齢者とソーシャルワーカーとの参加と協働からソーシャルワーク実践の可能性を考察することを目的とする。

そして、End of Life Care においてソーシャルワーク実践を利用者中心に展開していくために何が求められているのかというテーマに真摯に向き合って考察していきたい。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ソーシャルワークの視点をを用いている。生活コスモスへの広い視野と発想から、End of Life の状況にある要介護高齢者とソーシャルワーカーとの参加と協働による支援をプロセスとしてとらえていくためである。そこで、実存的・科学的支援展開としてエコシステム構想を活用し、生活コスモスをビジュアル化して示すことで共通認識や理解、そして、より深いニーズへと要介護高齢者とソーシャルワーカーとの参加と協働によって迫っていくことができると考えられる。

研究方法は、エコシステム構想における高齢者版支援ツールと End of Life Care 支援ツールを活用し、End of Life の状況で在宅での生活を基盤とする要介護高齢者 A 氏を対象とした約 4 年間の事例研究であり、A 氏の End of Life において、在宅から施設（病院）、そして施設（病院）から在宅へと遷りゆく過程における A 氏と家族の相互変容プロセスを 3 期にわけて考察する。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針にもとづき、本事例における個人名や施設名は、アルファベット表記や仮名とし、個人が特定できないように配慮している。

4. 研究結果

本研究では、利用者の実感を大切にす実存的な視座と生活情報をビジュアル化し、利用者の実感する生活とソーシャルワーカーのとらえる利用者の生活のズレを共通認識へと発展させることのできる科学的な方法によって利用者への生活支援が展開されている。

エコシステム構想を活用することで、A氏と家族のおもいの乖離を両者が実感し、ソーシャルワーカーの介入によって相互に変容していった。

具体的には、入院しているA氏の「本当は、家に帰りたいが、家族に迷惑をかけることになるため、家に帰りたいとは言えない」というおもいと、家族の「A氏の気持ちはわかるが、現実的に家で見ていくことは無理だと考えている」というおもいのズレが明確である状況にエコシステム構想を活用することによって、家に帰ることを一度はあきらめかけていたA氏のおもいを明確に意思表示することができるようになった。家族に対しては、A氏のおもいを代弁するだけではなく、これまでの生活の変容をビジュアル化したグラフを提示して説明することで「今度こそ、家に帰る準備をしましょう」といった発言や退院にむけての環境調整をおこなうことで、家族から「これならやれるような気がする」といった実感へと変容していった。A氏自身も家族の変容を実感することによって、身体的な側面はソフトランディングの状況であるが、明確な目標を掲げることができることによって、ビジュアル化されたグラフが全体的に広がりを示していった。

5. 考察

End of Life Careにおけるソーシャルワーク実践では、意識が曖昧、もしくは無い状態の要介護高齢者への支援展開として、意識が明晰の時にエコシステム構想にもとづく End of Life Care 支援ツールを活用し、要介護高齢者の参加と協働から現在の生活のみをとらえるのではなく、生活の変容やこれまでの人生を振り返る過程も必要である。それは、生活の全体性と実感を大切にすることに関して、実存的・科学的支援展開としてのエコシステム構想が寄与していると考えられる。

したがって、End of Life Careの“End”がただの終わりを意味するのではなく、人生の目的やそこから新しくはじまっていくというとらえ方もできることを意味しているといえる。まさに、自分の生きざま・死にざまが遺される者たちの生き方へと伝承していくことである。このような実存的・科学的支援展開が高度専門職としてのソーシャルワーカーに求められていると考えられる。